

Juichi WAKISAKA Race Report

2012 AUTOBACS SUPER GT -Round 3 SUPER GT INTERNATIONAL SERIES MALAYSIA-

◆◆ 驚愕の猛追が実を結び、4位でチェッカー！ ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	10位	4位

開催日：2012年6月9日-2012年6月10日

サーキット：セパンインターナショナルサーキット（マレーシア、コース全長：5.543km）

レース距離：54周（299.322km）

入場者数：予選日28,000名、決勝日：47,000名 合計：75,000名

チーム移籍後2戦目にして優勝を実現、新しい流れを作った今、さらなる上昇気流に乗りたいNo.39 DENSO KOBELCO SC430。シーズン戦の序盤を締めくくる第3戦の舞台は日本を離れ、マレーシア・セパンインターナショナルサーキットへと移された。予選日は赤道直下、亜熱帯らしくない薄曇りの一日となったが、翌日の決勝日は強い日差しが照りつける厳しい暑さに。その中で10番手スタートのNo.39 DENSO KOBELCO SC430はハイペースで周回を重ね、文字通りライバルを蹴散らす力強い走りで4位フィニッシュを達成。手応えある戦いを見せた。



■ 6月9日(土)

10:00-12:00 公式練習

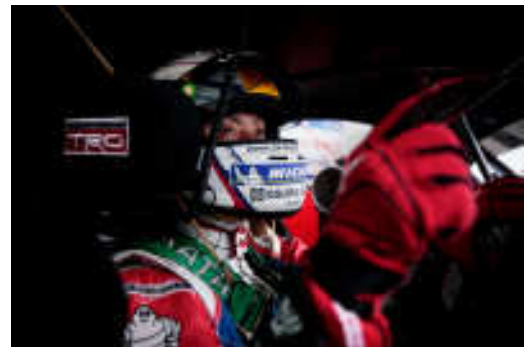
15:45-16:00 公式予選1回目(Q1)

17:09- スーパーラップ

【公式練習】 11番手 / 1'57.338

午前10時から2時間にわたって行われた練習走行。気温27度、路面温度は31度とセパンにしては「涼しい」コンディションでのセッション開始となった。2時間のうち、1時間40分はGT300クラスとの混走となり、チームでは持ち込みセットの確認をはじめ、その微調整やタイヤ確認などの細かな作業を進めた。

オフシーズンにはここセパンでテストを実施、存分な走り込みを行っているだけに、データをしかと活用し、前回の勝利でつかんだ勢いを持続させてシリーズタイトルに向けて好成績を残すことが理想とされる。まず最初にコースインした脇阪のチームメイト、石浦宏明選手は1分57秒真ん中のタイムをマーク。その後、脇阪へとスイッチする。セパン戦を前にスポーツランドSUGOでのテストを実施したことから、さらにクルマの改善が進んでいることを確認した脇阪。再び石浦選手へとバトンタッチし、その後マークした1分57秒338がチームのベストタイムとして刻まれた。実のところ、GT500専用時間帯の最後に脇阪がコースインし、ペースを上げて周回を重ね、1分57秒353をマーク。さらに1周、と意気込んだのだが、ここでタイムアップのチェッカーが出されることになり、セッション終了。No.39 DENSO KOBELCO SC430は11番手のポジションとなった。



【公式予選1回目】 6番手 / 1'57.281

今回の予選方式は、前回の富士戦同様スーパーラップが採用された。よって、チームでは脇阪は予選1回目(Q1)に出走、GT500上位10台がチャンスを得るスーパーラップでは石浦選手がアタックを行うという作戦で挑むことに。日本でのセッション開始よりもやや遅い、午後3時45分からQ1がスタート。午前よりも気温、路面温度ともに上昇し、それぞれ31度と44度という厳しい暑さに。そんな中、タイミングを見計らってコースインした脇阪。しっかりとタイヤを温め、アタックラップに入ったのだが…。なんと同じようにアタックを始めた他車がエンジンプロー。これにより赤旗が掲示されて、セッションが一旦中断することになった。オイル処理などの作業で水をさされたことになったが、ベテランの脇阪は集中力を途切れさせることなく残り4分で再開されたアタックに再チャレンジ。誰よりも速くコースへと向かい、果敢な攻めの走りを見せて1分57秒281のタイムをマーク。これが6番手タイムとなり、見事スーパーラップ進出を決めることになった。



【スーパーラップ】 10番手 / 1'59.175

スーパーラップが始まったのは午後5時すぎ。まだ強い夕暮れの日差しが残ってはいたが、路面温度は40度前後と若干下がってしまった。Q1の10番手チームからアタックを開始するため、No.39 DENSO KOBELCO SC430を駆る石浦選手は5番目にコースイン。セクター1を通過し、果敢な攻めで次のコーナーに向かったのだが…。勢い余りリアテールがスライド。縁石に乗ったクルマが跳ねてあわやスピンアウトする寸前だったが、なんとかこれを凌いだ石浦選手はそのままアタックを続行。このセクターはタイムロスが見られたが、その後は見事に建て直してチェッカー！ 1分59秒175のタイムで10番手から翌日の決勝を迎えることになった。

土曜のセッションを終えた脇阪。「前回の富士、そして菅生のテストで感じていたフィーリングの悪さというものが、このセパンで随分と改善されました。その手応えを感じ取れたことがとてもうれしいですね」と笑顔を見せた。その一方で、「今回はライバル達もポテンシャルアップを果たしてきており、予選での一発のタイムを狙うのは難しい状況だということもわかっていました。今回はしごとく、ある意味、淡々とレース運びをしていくことが最重要だと考えています」とレース展開の先を読んだ。一方で、「まずは今の自分たちが必要なことを刻々と準備することが大事ですから」と、目標に向けて着実な歩みを見せていることへの自信をものぞかせた。



■ 6月10日(日)

09:57-10:27 フリー走行 (09:40-09:57、10:35-10:52 サーキットサファリ)
16:00- 決勝 (54周)

【フリー走行】 3 番手 / 1'58.276

迎えた決勝日。前日とは天候が一転。じりじりと強い日差しが容赦なく照りつけ、亜熱帯特有の熱風がサーキットを包み込むような朝となった。そんな中、まずサーキットサファリの 1 回目が行われ、その直後の午前 9 時 57 分からフリー走行がスタート。気温 29 度、路面温度 37 度と数字だけ見れば前日と大差ない感じではあったが、広がる青空が物語るように太陽の光がダイレクトに伝わる中でのセッションがスタートした。

No.39 DENSO KOBELCO SC430 ではまずサファリで石浦選手がコースインし、スタート直後のシミュレーション状態で周回を重ねていく。

フリー走行開始後すぐに石浦選手がその時点でのトップタイムをマーク。クルマがいいコンディションにあることをアピールした。その後、7 周目から脇阪が走行を開始。途中、またも赤旗中断の事態になったが、好タイムを連発し、1 分 58 秒 286 の自己ベストタイムをマーク。脇阪は続く 2 回目のサファリも精力的に走行しメニューをこなした。結果的にフリー走行は石浦選手が刻んだ 1 分 58 秒 276 で 3 番手となり、決勝に向けて最後の準備を満足の行く形で終えている。



【決勝】 4 位 / 8 ポイント獲得（シリーズポイント：30 ポイント、シリーズランキング：3 位）

国内イベントであれば午後 2 時スタートの SUPER GT だが、セパンでは厳しい暑さを少しでも凌ぐために午後 4 時にスタートが切られる。54 周にわたる戦いは果たしてどのようなドラマを生むのだろうか。

フォーメーションラップが 2 周という珍しい形で幕を開けた第 3 戦決勝レース。オープニングラップの 1 コーナー進入は無事クリア。淡々とポジションアップのチャンスを狙っていくことになった。序盤、周りを含め、態勢が落ち着くと No.39 DENSO KOBELCO SC430 は 9 番手をキープ。ここからじわりじわりとポジションを引き上げていきたいところだ。タイヤに熱が入り、速いペースが安定してきたのを機に、石浦選手は果敢に攻めの走りを見せ、逆転のチャンスを伺った。

レースは 20 周を過ぎたところから早くもルーティンワークのピットインがスタート。そして No.39 DENSO KOBELCO SC430 でも周りとの兼ね合いを見計らって 24 周終了時点でピットインを遂行。スタッフは 33.8 秒というスピーディなピット作業を済ませ、脇阪をコースへと送り込んだ。石浦選手からバトンを受け取った脇阪は、すぐさまペースアップを図り、力強い走りを見せる。とりわけルーティンでドライバー交代したばかりの車両が増えたときにはここぞとばかりペースアップ。1 号車 GT-R を 2 コーナーで

抜き去り、さらに 100 号車 HSV を 14 コーナーでパス、あっという間にポジションアップを果たし、33 周終了時点で 7 番手につける活躍を見せた。

そつなく、そしてキレのある走りでライバルを逆転していく脇阪。しかし実のところ、自身のコースイン直後からブレーキに不具合を抱えており、決して万全とは言えない状況下でのドライビングを強いられていた。そのため、次のターゲットである 36 号車 SC に対してはすぐに抜き去ることもできたが、ブレーキの不具合もあり、同じ SC 勢同士での接触を避けるためにも、それほどハードブレーキングを必要としないタイミングを見定めるため数周勝負を我慢、そして 38 周目に見事 36 号車をヘアピンで逆転。自らのレースだけでなく SC 勢全体の事をも考えレースを戦う脇阪の見事な判断だ。その後は前を走るもう一台の SC 勢、6 号車の追隨を開始。一方で 6 号車は前方の 12 号車 GT-R を猛追しており、脇阪のターゲットは一旦 12 号車の GT-R に入れ替わったが、49 周目にこれを巧みに料理。4 番手へと浮上した。こうなると、もう目の前には 6 号車の存在のみ。その差は決して小さくなかったが、脇阪は最後の最後まで攻めの手を緩めず、6 号車とのギャップを 5 秒も削る力走を見せた。この先、SUGO、鈴鹿と続く夏の連戦に向けて確かな手応えといい流れを作るためにも一貫して力強い走りをキープ、4 位でフィニッシュした。

第 2 戦の優勝、そして今回セパンで 4 位入賞を果たしたチームは、現時点でシリーズランキング 3 位をキープ。シリーズ中盤戦に向けていい形で序盤の 3 レースを終えることとなった。



「5 月の菅生テストの時に感じたクルマのフィーリングやウェイト（44Kg）などの現状を考えると、4 位という結果は今回のベストリザルトに近い。もちろんブレーキトラブルがなかったら、前を行っていた 6 号車とのバトルに持ち込めたわけなので、そう考えると悔しい部分もありますが…。しかし、今回のレースを終えて、これからのクルマの方向性、タイヤの方向性、チーム全体としてどうやってシーズンを戦っていくかの方向性も明確にする事が出来たと思います」

不具合が出たブレーキについては「ブレーキそのものなのか、クルマあるいはタイヤ、どこに原因があるかまだわかりません。菅生までにしっかりと原因を究明していきます。一方で、総体的にはチームの頑張りがレースに反映され、僕自身もいい戦いができたことが新しい自信につながりました。みんな次の菅生の戦いを楽しみにしています。シリーズチャンピオンを獲得するために必要不可欠な「一体感」が出てきたと強く感じる事ができたことがすごく嬉しいですね。」と好材料が揃い始めたことで、ますます勢いづきそうだ。

次戦は、7 月 28 日(土)・29 日(日)に「魔物が棲む」と言われるスポーツランド SUGO（宮城県仙台市）で開催される。

[Photo Gallery]

